

## 令和 4 年度第 1 回開かれた学校づくり協議会代表者会議での熟議の主な意見

(日時：令和 4 年 8 月 23 日（火）18：00～20：00)

テーマ：強化された開かれた学校づくり協議会への期待と課題

(1) 開かれた学校づくり協議会を強化することで、新しくできそうなことや、期待すること
人数が増えることで、様々な団体が関わり、認知度が上がっていくのではないかと。開かれた学校づくり協議会で合意を得られると、学校は色々なことに挑戦できる。保護者の負担も減ってくる。
学校の問題について地域と話すことで、見守ってくれることに繋がっていく。
今までは提案したいことがあっても教育課程が固まっていたのでできなかった。回数が増えることで、今後提案できる機会も増えそう。
公募で教員を呼べるのは良い。
委員数の増を含め、教育活動に 1 回でも関わる人が増えることはよい。
地域団体も次世代につなぐことが課題になっている。開かれた学校づくり協議会だけが、持続可能性を目指して変化するのではなく、地域団体にもよい影響となることを期待したい。
学校が本当に委員になってほしい方に委員をお願いできる仕組み、また新しい委員を選びやすい仕組みを作る。現在は、任期は 1 年となっているが同じ委員がずっと続けている。学校も委員を変えることを言い出しにくいのではないかと。
委員の人数と開催回数が増えることによって、余裕ができて自由な議論ができるようになる。 自分の学校だけでなく他の学校とも交流する機会を作り、大きな広がりのある協議会にできると良いと思う。1 年間の実施回数が 4 回では少な過ぎて、形式的で義務的になっている。
新しい開かれた学校づくり協議会が軌道に乗ると、校長、副校長はじめ教員は子どもの学びに没頭することができ、学校のモチベーションが上がっていく。
モデル校以外でも、学校が困っていることの解決が開かれた学校づくり協議会でできたらいい。それを体感することが成果物となる。
開かれの仕組みをどう変えていくかに期待。実践的な活動をしていかないといけない。楽しくまとまるといい。
武蔵野市は地域のつながりが出来上がっているので、学校はそれを上手に利用したら良い。地域に甘えたらいいと思う。
教育の目標を共有して現在進行形で「できた事の確認」「できなかった事の確認」をしながらやる。この取組により、先生方へのヘルプができるとうい。学校の門をくぐるのは足が重いところがある。具体的な支援内容を出してもらえると入りやすい。

学校の支援スタッフを地域の方に協力してもらえるといいと思う。地域に SNS グループがあって案内を出している。そういったところとも連携ができるといいのではないか。
地域コーディネーターの人数が増えるのはとてもありがたい。人探しをしょっちゅうしている。学校から要望があったものを準備するのも大変な時がある。地域事情に精通している人が必要だ。

(2) 開かれた学校づくり協議会を強化することに対する課題
人数と回数が増えることで、副校長先生の仕事の負担が増してしまうのではないか。地域コーディネーターを増やすだけでは負担が増すだけになってしまう。
この回数をこなすのに、スケジュール的に厳しい。児童生徒の理解が得られていない中で、どれだけ内容がある話し合いができるのか。またメンバーがどうなるのか不安。人選が重要。現状、学校ごとにやり方が違う中で統一したものを作るべきなのか？先生たちが運営しやすい協議会を目標とするなかで、モデル校は大変になりそう。
児童は増えているが、家庭の協力がどこまで得られるのか。皆さん働いて忙しいから大変ではないか。
人数が増えることは良いが、人選は難しい。学校の負担にならないように、地域コーディネーターとして提案しないようにしていた。地域から提案が増えることで、誰かの負担が増えてしまう。また、提案された議題をじっくり話し合える時間があるのか。承認するために話し合う時間が足りないのではないか。話し合うことが増えすぎて、時間切れで承認されてしまうのでは。意見を出せることで「今まではこうだったのに」等と言いたいことを言いやすくなってしまい混乱するのでは。
持続可能な組織にしていかなければいけない。参画してもらったのに、実行できなければ諦められてしまう。そうすると事務局の仕事が大変になりそう。また、提案をまとめて実行に移すのが地域コーディネーターになってしまうのではないか。
開かれた学校づくり協議会は、学校からの報告が多く、委員の考えを聞くことは少ない。学校の中身に精通していないのに意見することは学校をかき乱すのではないか。
学校の先生たちが忙しいことは、自分が子育てをしているときより家庭との連携のうえで負担になっていることはよく分かる。しかし、個人情報の取扱いを含め、どこまで踏み込め、どれだけ学校の負担を緩和できるのか懸念がある。
学校が忙しいのは、教員数が絶対的に足りないからではないか。教員の多忙化と開かれた学校づくり協議会の強化とつながるのが、しっかりとこない。
世代交代、次世代につないでいくためのバトンのリレーが難しい。走っていない人にリレーはできないので、一緒に走って行ける人を掘り起こし

ていかないといけない。
かつては、学校と家庭のつながりで解決できていたが、地域が大切な要素となっている。しかし、地域も幅広く対応できるわけではない。
開催時間について、仕事を持っている委員の都合に合わせると夜の時間帯の開催になるが、そうすることで先生の負担が増えないか。
協議会の開催回数が増えることによる負担の増加。しかし、回数が増えても達成感があれば負担感は減らすことができる。
保護者の意見を聞きたい。保護者はどこを向いているのか。保護者とベクトルが合わせられるのかが不安。
外に開くというところでは、現在の協議会はまだまだ広報が足りない。
先生方がどんなことに困っているのかをもっと知りたい。親はどういう授業が行われているかが分からない。
地域の中には携帯電話を持っていない方もいる。アナログ世代とデジタル世代の間で地域コーディネーターとして困っている。デジタル化が進む中でアナログ派が置いてけぼりにならないようにしていく必要がある。
12名の枠はすぐに埋まるだろうが、果たして仕事分担ができるか。地域コーディネーターなど一部に仕事が偏るのではないか。
校長の学校経営方針に意見を申し上げるのはなかなか難しい。校長が招集をしていると、特に物申しにくい。言っている雰囲気をつくっていくことが大切。
校長によって開かれた学校づくり協議会の持ち方が色々。中には学校評価の文言の検討まで協議会で行う人もいた。どんな校長が来るかによっても変わってくる。学校の役割や留意事項についてもガイドラインに明記すべき。
開かれた学校づくり協議会の委員になっても何をするとといった役割の説明をちゃんと受けていない。どんな役割があるのかガイドラインが大切になってくる。
評価するというのが、評価の基準が分からない。他の学校との比較などもできにくい。学校と委員が同じ方向を向いていくことが大切なんだろう。

### (3) その他

開かれた学校づくり協議会は傍聴も可とすることで、「開かれた」状態になっている。もっと開く協議会になるとよい。
開かれた学校づくり協議会の中で何を話し合うのか、これからどう学校と向き合っていくのか。校長がどのように提示するかによって、学校によって進め方が違って来るかもしれない。通知表は学期ごとの評価でしかない。日常の評価を渡す方が子どもの学びに繋がる。より良い方法を模索しようとするときに、開かれた学校づくり協議会に議題として話し合うことで、理解してもらい協力してもらうことに繋がるかもしれない。
地域と相談したいことに、議題は絞るべきではないか。議題の重点化をしないと学校運営全般にわたって話し合うことは不可能。校長が議題を選ばないと厳しい。校長は開かれた学校づくり協議会の議長にならない方がよいのでは。学識経験者などが議長になった方が、学校の負荷にならな

いのではないか。
小学校と中学校の開かれた学校づくり協議会の違いが見えてきていない。今後、モデル校を通して見えてくるのかもしれない。
市講師や部活動指導員など、予算はあっても担ってもらえる人がいない。ネットワークづくりが課題。
公募の基準などの設定は難しいと考えるが、開かれた学校づくり協議会の委員は公募してもよいのではないか。
武蔵野市に転入される方々の不安を解消していただくために、地域団体に入っていただくことをお願いしている。コミセンにつながってもらうために、市には転入者にコミセンの案内をお願いしている。開かれた学校づくり協議会についても同様に案内した方がよい。
I C Tを活用したシステムを導入するというが、各校の実情に合うようその地域市民の力を活用してシステムを作った方がよい。
本当の意味で開かなくてはいけない。形式的でない開かれにすることを目標にしたい。そのために学校と信頼関係を築き、もっと主体性を持った活動をしていけると良い。
学校側からも開かれた学校づくり協議会に何をしてほしいかを言ってほしい。
校長先生・学校と信頼関係を築くのが難しい。校長先生が代わると今までのことがすべて変わってしまう。コミュニケーションとバランスが大切。
中間まとめ（案）の中にコロナのことが書かれていなかったが、学校の活動はコロナの影響を非常に強く受けている。コロナの影響で PTA における業務継続や学校と地域の人間関係など今までつながっていたところが切れてしまっている。このような状況になったとしてもいかにつなげていけるかを新しい体制の中で考えなければならない。
人数を増やすより、今の人数でやり方を考え、まとまってやる。
以前は開かれた学校づくり協議会は物足りなかった。「なぜ？」と思うことが多かった。学校からの伝達等一方通行で学校評価を求められた。今はメンバーが変わり意見が出るようになり「子どもたちのために」になってきた。
地域は学校を守ろうという意識が強い。
青少協の力が弱まった部分が開かれに移行されてきたように思う。
池田小の事件後に「開かれた」が一気に閉じた。今の名称では何をやっている団体なのか分かりにくい。内容をリニューアルするのであれば、名称変更も視野に入れた方がいい。他の自治体の名称を参考にしては。
地域のコミュニティの軸がコミセンと学校 2 つある感じがある。子どもたちがいる保護者は学校中心だろうが。
保護者同士のコミュニティもどうつなげていくか。学校行事があっても各家庭で回っているだけ。各団体があってもそれぞれ点の取組で面になっていない。青少協も役員が定数割れしている。
コミュニティや団体にボランティアで参加したい人はいるだろうが参加者から主体者になっていくにはハードルがある。また、自己主張だけする参加者にはご遠慮願いたいと思う。